

- 1 派遣期日 平成28年11月12日(土)
 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属中学校
 所在地 東京都文京区大塚1丁目9-1
<http://www.high-s.tsukuba.ac.jp/jhs/wp/>

3 研修内容

研究主題 生徒の思考力・判断力・表現力の向上を支える豊かな言語活動
 —主体性・多様性・協働性等を育てる道徳・特別活動—

(1)はじめに

筑波大学附属中学校では、平成24年度から全面实施された学習指導要領の改訂のキーワードとなっている「思考力・判断力・表現力の育成」及び「言語活動の充実」について研究協議会で発表すべく、平成23年度から議論を進め、実践・発表に取り組んできた学校である。

特に独自の教育課程構想を实践しており、HR活動の中にHRH(ホームルームアワー)が位置付けられている。HRHとは、道徳と特別活動の学級・学年指導の部分を融合させた時間であり、同一学年の全学級を一斉指導できるように時間割上配慮されている。

表1 本校の教育課程構想図(平成17年度研究協議会発表要項より)

教科領域		活動領域	
①教科学習	②総合的学習	③HR活動	④実践的活動
○各教科 ○特別選択学習	○情報リテラシー学習 ○総合学習1,2 ○行事的学習* ・合唱発表会 ・校外学習 ・修学旅行	○HRH* ○学級・学年活動 (学年行事)	○儀式的活動 ○自治的活動 ・生徒会活動 ・部/研究会活動

* HRH(ホームルームアワー)…道徳と特別活動の学級・学年指導の部分を融合させた時間であり、同一学年の全学級を一斉指導できるように時間割上も配慮されている。

(2)これからの道徳と評価 ～考え議論する問題解決型の道徳～

平成30年度(小学校)及び平成31年度(中学校)からの「特別の教科 道徳(道徳科)」の完全実施に向けて、私たちはどのように進めていけばよいかを押さえたい。

①具体的なポイント

「考え、議論する」道徳科への転換により児童生徒の道徳性を育むことを目標にしている。

- ・道徳科に検定教科書を導入
- ・内容について、いじめ問題への対応の充実や発達段階をより一層踏まえた体系的なものに改善
- ・問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れ、指導方法を工夫
- ・数値評価ではなく、児童生徒の道徳性に係る成長の様子を把握

②特別教科化がめざすもの

- ・年間35時間単位時間が確実に確保されるという(量的確保)
- ・子どもたちが道徳的価値を理解し、これまで以上に深く考えてその自覚を深める(質的転換)

③道徳科のアクティブ・ラーニング

- ・「読み取り道徳」から「考え議論する道徳」へ
- ・「知識内容の習得」から「資質・能力の育成」へ
- ・「道徳的価値の理解を重視した指導」から「道徳性の育成を重視した指導」へ

④道徳教育に係る評価

- ・数値による評価ではなく記述式とする
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価
- ・他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒の成長を積極的に受け止めて、認め、励ます個人内評価
- ・調査書に記載せず、入学者選抜の可否判定に活用することがないようにする

(3)授業実践

①考え・議論する問題設定と問題解決的な学習の授業展開の工夫

本時の主題名は「生命の尊さ」、資料名が「繋がる命(新聞に掲載された両親の手記より)」である。内容としては「臓器移植」で、脳死と判定されたわが子の臓器の提供を決断した両親の手記を基に授業が進められた。

考え、議論する問題設定としては「臓器移植を提供された患者の家族の立場と提供することになった家族の立場」「提供を決断した父親の気持ちとそれでも割り切れない母親の気持ち」である。答えがあるかないか分からない、まさに解を限定しない発問に対して、生徒はペアトーク→グループトーク→全体と形態を変えながら、真剣に考え、議論していた。さらに、問題解決的な学習の授業展開として起点となる「子供が道徳的問題に関心をもち、主体的に取り組み、多様な

解決策について自ら考え、判断し、議論する学習」を満たすべく内容であった。事前に「脳死」「臓器移植」「臓器移植意思表示カード(ドナーカード)」等の学習をした上での本時であったため、生徒はそれぞれの立場や感情を多角的・多面的に捉え生徒と教師、生徒と生徒が議論を進めていく中で、ねらいとする生命の大切さに気付き、前向きに行動しようとする実践意欲にあふれていた。終末の部分で涙を流す生徒や、チャイムが鳴っても黙々とワークシートに感想を書いている生徒がいて、とても印象的であった。

臓器移植を提供された患者の家族の立場	臓器を提供することになった家族の立場
・我が子が生き延びられる喜び・嬉しさ ・感謝の気持ちで一杯になる ・提供する側に立ったら申し訳ない	・臓器を必要としている人の気持ちも分かる ・臓器を提供すれば生き延びる子供がいる ・本当にこれでよかったのか(葛藤)
提供を決断した父親の気持ち	割り切れない母親の気持ち
・我が子の臓器が別の子の体の中で生き続けられる(役に立つ)のだから尊いこと ・同じ歳の子供の命を救うことができる	・体は温かいのだから、割り切れない ・もしかしたら、目を覚ますかもしれない ・我が子の脳死を受け入れられない

②道徳科におけるアクティブラーニング

「読み取り道徳」から「考え議論する道徳」、「主体的・対話的・深い学び」が道徳科におけるアクティブラーニングである。知識内容の習得から資質・能力の育成を目標としている。

授業の中盤に「私たちに生きていくとはどんなことだろう」とあった。それまでは臓器を提供する側・される側の立場で議論していた後の発問に、生徒はここで「自分のこととして考える」ことになった。一人一人考える場面は「沈黙の学び・黙り合いの学び」からペアトーク・全体での対話的な学びが成立していた。自分の生活経験を踏まえた生徒の意見は多岐にわたっていた。

- ・ 生きるとは幸せを感じることに、うれしいときや楽しいときに笑えて、悲しいときや悔しいときに泣けること。
- ・ 喜怒哀楽、緊張や焦りなどの感情は生きているからできること。生きることは無限に続く
- ・ 生きることには答えはない。求め続けていくことが生きること。
- ・ 肉体はなくなっても、他人の意識・心にある限り、それは生きていることと同じ

これらの意見に対して、賛成・反対・同感などの立場を明らかにしながらも、どの生徒も多様な考えを受け入れながら、自分の考えを深めていた。

③「考え・議論する道徳」を実現する指導の工夫と評価

生徒の道徳性について評価するにあたり、数値評価ではなく記述式としている。また、個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価になる。指導要録や通知表に記述による評価をするためにも、ポートフォリオ評価が有効であると述べられていた。

本時のワークシートで、

- ・「考えることができなければ人ではない(生きていることにならない)」
⇒命の選別につながる危険性
- ・「臓器移植意思表示カードに同意したい」
⇒将来あるいは実際にその立場になったら、分からない

このような感想を書く生徒も含め、色々な感想や意見を書いた生徒のワークシートにはコメントを入れて返したり、個別に話をしたりして個々に対応すること(評価すること)も大切であることを述べていた。

(4)感想

道徳の授業を参観して、一人一人の生徒がそれぞれ自分の考えをもち、自信をもって述べていることに大変感動した。「生命の尊さ」「臓器移植」と、昨今のいじめ問題や最先端医療技術の進歩と問題点に関わりつつ、公民・理科・保健体育など他教科ともつながる多角的・多面的に議論することができる教材であったが、中学生には難しい内容ではないかと思った。しかし、ていねいな事前学習や他教科との連携により、生徒は単に感情論を述べたり、解決策を求めたりするのではなく、この「答えがあるかないか分からない、考えがいのある課題」について様々な立場の気持ちを考え、友達の意見を聞きながら、真剣に議論していた。その生徒の表情や発表からは「過去の自分はどうだったのか」「これから自分はどのように行動すればよいのか」という主体的な学びの姿が見られた。

また、これだけの大人数の中においても、自分の言葉で、しっかりと考えを述べられる背景には、全ての教育活動における「学び」に対して、学校全体・全職員で取り組んでいることや教師と生徒、生徒同士の強い信頼関係の上に成り立っていることが感じられた。特に道徳の授業の発問では「あなたならどうしますか(行動)」ではなく、「あなたはどのように思いますか(気持ち)」を問うことで、生徒に言わせやすくする、言いたくなる発問を練ることの重要性も分かった。

それぞれ学校の校風や教育理念、環境等は違っても、今を生きる中学生であることに違いはない。今回の研修で得た多くのことを自校の実態応じて実践し、今後の道徳教育に生かしていきたい。